

都留文科大学報

第120号
2012年
12月6日(木)

編集 都留文科大学広報委員会

〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1 都留文科大学内
☎ 0554-43-4341 URL: <http://www.tsuru.ac.jp/>



ロンドンオリンピックの報告



第57回桂川祭(学長と鍋ろう)



キャリア支援センターがリニューアルオープン



秋季オープンキャンパス(個別相談会)

特集 ロンドンオリンピック 2

夢舞台 本学職員 佐野夢加選手
陸上競技部監督 麻場一徳

夏季休業を利用して学外で学ぶ 6

初等教育学科教授	鳥原正敏／4年	森 一平
国文学科教授	楠元六男／4年	草苅友恵
英文学科准教授	三浦幸子／4年	徳山琴美
社会学科教授	進藤 兵／3年	佐藤理恵
比較文化学科准教授	山本芳美／1年	佐々木郁音

教育実習を終えて 11

初等教育学科3年	比嘉光代
国文学科3年	加藤郁美
英文学科4年	八木亜沙美

講演会だより 14

英文学科・英文学会共催前期講演会
社会学科講演会

文大だより 16

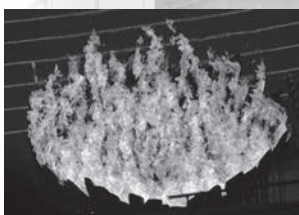
夏季オープンキャンパス報告
学内防災訓練実施
第39回 鶴鷹祭
都留市防災講演会
合唱団 5年連続全国大会出場！
とびだせ美術館！「アート巣箱をつくろう」
第57回桂川祭
準硬式野球部 清瀬杯出場
市民公開講座
平成24年度 県民コミュニティカレッジ講座
現職教員教育講座
教員免許更新講座
キズナプロジェクトによりバヌアツ、パラオの学生が本学を見学
都留市「ふるさと時代祭り」へ参加
ドイツの若者と交流して
韓国外国語大学校との交換留学が始まります
キャリア支援センターがリニューアルオープン
サクライザーが来校、モダンダンスサークルを救う！
宝小学校6年生による大学見学
秋季オープンキャンパス報告
前期修了者卒業式
山本美香さんを偲んで
県立桂高等学校跡地の利活用問題について
編集後記 ロンドンオリンピック観戦記
本 ぶんだい堂



ロンドンオリンピック

平成 24 年 7 月 27 日～8 月 12 日、イギリスにおいてロンドンオリンピック（第 30 回夏季オリンピック）が開催され、世界中（204 の国と地域）から約 11,000 人が参加し、26 競技 302 種目で世界最高峰の熱戦が繰り広げられました。

本学からは職員の佐野夢加さんが48年ぶりの出場となる4×100mリレーのアンカーとして、また、初等教育学科 麻場一徳教授がナショナルチームのコーチとして参加しました。



夢 舞 台 ～ロンドンオリンピック～



都留文科大学職員
佐野夢加

2012 年夏。私の夢・目標であったロンドンオリンピックが幕を開けそして幕を閉じました。振り返ってみると長かったような短かったような不思議な感覚でいます。ロンドンオリンピックが終わり、数日が経った今、私から皆様にこの場をかりて感謝の気持ちを伝えさせていただきます。

私がこの大舞台に立てたことは自分を支えてくださる全ての皆様のおかげです。

私にとって都留文科大学とは陸上競技だけ

でなく、人として成長させてくれた場所です。特に特別な事をしてきたわけではなく、今ある自分の環境の中で精一杯の事をしてきた結果だと思っています。そこには多くの人との関わりがあり、応援があり、そして支えがありました。だからこそ、ここまで続けてくることができ、ロンドンオリンピックという舞台を夢みて目指すことが出来ました。

恩師である麻場先生が成し遂げられなかったオリンピック出場は、私がすると心に決めていました。これこそが私の出来る最大の目標となりました。大学に入学して9年間共に歩んできた先生が口にしていた「先生を超え



オリンピックスタジアム

特集

ロンドンオリンピック

る選手になってほしい」という言葉が、ここに来て私を大きく成長させてくれました。「ただ走ることが楽しかった」小学生時代の素直な気持ち、私の背中を押してくれました。最後は初心の気持ちに戻るのが私には感じました。



オリンピックスタジアム内の様子

ます。本気でやった結果には、きっと悔いは残らないと私は思っています。夢や目標に向かってここまで競技をさせてもらったことに感謝し、これからの生活を送っていきたいと思います。

都留文科大学に関わるすべての皆様、本当に応援ありがとうございました。

競技を始めて19年。今まで支えてくださった全ての方にオリンピックを身近に感じてもらえ、自分が走ることで誰かに勇気や希望を与えられていたら、これほど嬉しいことはありません。本気でやれば絶対できる事を証明したかったし本気を伝えたかった。



後輩たちには大学での4年間を悔いのない時間にしてもらいたいと思います



レース直前の様子

佐野夢加プロフィール

山梨県富士川町生まれ、都留文科大学職員陸上競技部に所属
町立増穂中学校 → 駿台甲府高等学校 → 都留文科大学

平成20年3月に本学文学部初等教育学科を卒業、4月より総務課職員（現在に至る）

主な競技成績など

山梨県記録（女子100m）保持 11秒59

【平成22年4月 織田記念】

国民体育大会10回連続出場

平成21年7月 日本GP南部忠平記念陸上競技大会
100m優勝

平成22年5月 東日本実業団選手権大会 100m優勝

平成22年9月 IAAFコンチネンタルカップアジア・
オセアニア代表 4×100mリレー出場

〃 全日本実業団選手権大会 100m優勝

平成22年11月 広州アジア大会日本代表 4×100mリレー
レー出場

平成24年8月 ロンドンオリンピック4×100mリレー
にアンカーとして出場



力走する佐野選手

特集

ロンドンオリンピック



本部棟への応援横断幕！



都留市長への報告



学内壮行会にて



壮行会の様子



学内観戦応援会
(午前3時頃)



理事長へオリンピックの報告



一日警察署長として、広報活動にも活躍

特集

ロンドンオリンピック

ロンドンオリンピック



都留文科大学
陸上競技部 監督
麻場一徳

8月9日、ロンドンオリンピックスタジアムにおいて8万人の大観衆の中、佐野夢加が陸上女子4×100m日本リレーチームのアンカーとしてトラックを駆け抜けました。本学陸上競技部関係者にとっては、まさに夢の舞台となりました。

この間、大学関係者の皆さまには、物心両面からの多大なるご支援、本当にありがとうございました。多くの人たちの応援があったからこそ、佐野はここまで来ることができました。本人も、皆さんに喜んでいただけたことが一番だと思っています。

私が指導者を志すにあたって大きな目標を掲げたことを思い出します。「自分を超え



スタート指導の様子

る競技者を育てたい」と思って指導者人生をスタートさせました。自分を超えたかどうかを自分自身で判断することは難しいですが、少なくとも、自分が競技者として達成できなかったオリンピック出場を、彼女が果たしてくれたことに大きな喜びを感じています。

また、日本女子短距離チームのリーダーとしてチームを預かって5年、このロンドンオリンピックをナショナルチームの指導者としての集大成と考えていただけたに、その

舞台に二人で参加できたことには大きな感慨があります。日本リレーチーム自体の結果は決して良くありませんでしたが、これをきっかけにして今後日本の女子スプリンターが世界を舞台に戦っていく姿を楽しみにしたいと思います。

オリンピック選手が出ましたが、本学陸上競技部の活動方針が変わることはありません。「日々全力疾走」をモットーに、全員が伸びる集団を目指していきたいと思っています。そして、常に感謝の気持ちを忘れず、社会に貢献できる人間づくりを、陸上競技を通して実現していきたいと思っています。

今後とも、ご指導、ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。



陸上部のみんなと記念撮影

学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

山梨県立美術館見学



初等教育学科
美術教室教授
鳥原正敏

これまで美術教室では、地域と連携した子どものための取り組みを模索してきました。本年度7月15日にその第一弾として、ワークショップ「アート巣箱をつくろう」を美術棟で開催しました。ここで制作された作品は、山梨県立美術館の「とびだせ美術館！アートの種まきワークショップ」の中に展示されました。そこで我々教員と関わった学生で、その成果を確認するために、夏休みを利用して県立美術館を訪れました。



夏季休業を利用して 学外で学ぶ

初等教育学科美術専攻4年
森 一平

私と専攻の仲間は「アート巣箱をつくろう」に、企画・運営スタッフとして参加しました。数ヶ月前から準備は始まり、専攻生総動員で150個以上の巣箱を組み立てました。作品は巣箱として機能することがテーマであったため、「だれが作った巣箱にいち早く鳥が住むか」など、作業中の会話が弾み、楽しく準備を行うことができました。また、我々も事前に試作とし

て巣箱に絵を描いてみました。気がつくと、子どもの頃いたずらで家の壁や床に絵を描いて遊んでいたような感覚になり、夢中になりました。普段は、制作の前にスケッチなどで案をまとめるのですが、今回は、直感的なイメージと感覚で制作した為か、いつもとは違った良さのある作品になったと思います。「アート巣箱をつくろう」当日は、予想以上の多くの方にご参

加頂きました。子どもたちも保護者の方たちも、とても楽しそうに制作している様子が印象的で、嬉しく思いました。子どもたちは勿論、大人も

子どもに負けじと、熱心に制作していました。普段、親子で一緒に制作するという機会は、あまり無いことだと思います。大人が子どもたちと同じ気持ちで、楽しみながら制作していたことが子どもたちに伝わり、良い影響を与えていたと思いました。完成した作品はどれも個性豊かで、一生懸命作った様子が見てとれ、とても見応えがありました。美術館での展示では、私自身の作品も有名な作家の作品と同じ建物の中に展示されたこと、そして多くの方々に見ていただけたことなど、貴重な体験となりました。また、子どもたちにとっても、たいへん良い経験になったと思います。そして、作品は完成して終わりではなく、他の参加者の作品と一緒に展示することにより、今後の制作に向けての自信や目標に繋がっていくことを改めて実感しました。今回の制作・展示を通して子どもたちも、私のように美術館のよさや展示の楽しさに気付いてくれればよいと思いました。



山梨県立美術館にて

学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

学外研修



国文学科教授
楠元六男

今夏、学生数人と天理大学附属図書館へ資料探訪の研修に出かけた。九月中旬の三泊四日という短い期間ながら、学生さんたちにとっては、貴重な体験になったのではないかとと思っている。

この研修は、ミュージアム都留で年末から一月にかけて举行される、「甲州俳諧展」に関する調査を主眼としている。今年は「芭蕉と素堂」のテーマで開催されるのだが、主に素堂に関する調査を中心とした。なお、本研修は、大学から支給される重点研究の予算で処理されたことをおことわりしておく。単なる観光ではない資料調査ということなので、学生さんたちは悪戦苦闘したと思うが、膨大な貴重書を所蔵する天理大学附属図書館での経験は、有意義なものになったことと信じている。



近世資料文書研究会に 参加して

国文学科4年 草苺友恵

私たち国文学科近世資料文書研究会の面々は、九月十二日から十五日にかけての四日間、奈良県で合宿を行いました。目的は、天理大学附属図書館で研究会の資料を収集することです。

近世資料文書研究会では毎年、ミュージアム都留での展示会に協力させていただいており、今年はテーマを「芭蕉と素堂」に据え、昨年に引き続き山口素堂の事を調査してきました。山梨出身であり、芭蕉に生涯を通じて大きな影響を与えた素堂の文学観を解明しようと、夏休みの間も研究のために楠元先生のご指導の下、日々研究に励む毎日でした。

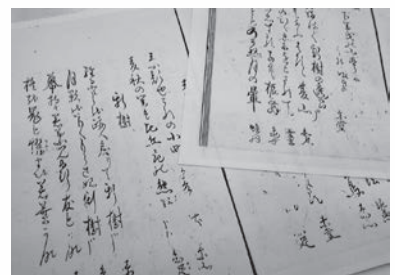
天理大学附属図書館には、綿屋文庫として俳諧関係の資料が数多く保管されています。今回の旅における主な作業は、図書館に通って素堂の詠んだ発句を、あらかじめ入集の状態を確認しておいたデータをもとに、ひとつひとつ

つ手分けして確認していく作業です。京都を経由し、奈良県に二日間宿泊しながら、天理図書館に通い、作業を勧めました。マイクロフィルムに収められた版本の写真はもちろん、翻刻されていない崩し字で書かれているので、読み進めるだけでも未熟な我々には難儀な作業です。しかし、日程的にも余裕がない中、先生のご指導と、親切な天理大学附属図書館の司書の方のおかげで、なんとか調査を終えることができました。

今回、国文学科の学生として、生の資料に触れ、調査・考察する機会を与えていただきましたことは大変な幸運であると感じています。学生の身でありながら、これほどきちんとした調査を体験することは本来個人の裁量だけでは不可能であり、先生のご指導を受けながら「学び」とはいいかなるものであるかということを実感した思いです。

現在は調査した内容から、冬の展示に向けてさらに考察を深め、実地的な作業を進めている最中です。並行して、素堂の発句の解説書である馬場錦江著『白蓮集解説』も、研究生たちの間で読み進め、翻刻を試みています。

今年度で楠元先生が御退官されるため、今回の展示が甲州俳諧展を行う最後の機会になるかもしれません。近世資料文書研究会の先輩方から連綿と引き継がれてきた展示も、いわば今年がフィナーレとなるわけで、かける意気込みはひとしおです。今年も、ポスターやチラシ、展示の具体などは、学生たちで話し合いながら作り上げたものなので、是非ともこの展示を成功させ、有終の美を飾れるよう研究生一同、努力していきたいと考えております。



調査した資料

学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

個人での海外研修
体験談

英文学科准教授
三浦幸子

昨今、日本の若者は概して「内向き」で海外に出たがらない傾向にあると言われますが、個人レベルではその逆に、積極的に外に出て意欲的に学ぶ学生も多いと感じます。海外に出て学ぶ意味は、外国語を勉強すると同様に、自分の文化やものの見方から解放されてより客観的に世界を見つめ、自らを振り返る視点を育み、自己の成長につなげる機会が得られることだと思います。事前の情報収集と調査を十分したうえで計画をたて、安全で有意義な体験をしてくれることを望みます。

夏季休業を利用して学外で学ぶ
～カンボジアの歴史と人々に触れて～

英文学科4年 徳山琴美

私はこの夏休みに、カンボジアのプノンペンとシェムリアップを訪れました。今回の旅の目的は二つで、一つ目は、ベトナム戦争・カンボジア戦争の頃のポルポト政権が残した過去を知り、平和について考えること。二つ目は、アンコール王朝繁栄の地シェムリアップを訪れて、荘厳なアジアの文化を見ることです。

まず訪れたのはプノンペンで、そこでは、ポルポト政権時代の傷跡が残されたキリングフィールド(killing field)やトゥールスレン拘置所を訪れました。拘置所には多くの犠牲者の写真が残されており、同じ民族をどうしてここまで悲惨な方法で殺すことができたのかと思う事実ばかりでした。これらの過去としっかり向き合い、この

世界で2度と繰り返してはいけないことだと痛感しました。

その日は、気持ちが悪く落ち込んでいましたが、うれしい一言を掛けてもらった日でもありました。ある男性が、東日本大震災のことで日本を心配して私に声をかけてくれました。彼は、「まだまだ大変だと思うけど、きっと乗り越えて元気な日本になることを祈っているよ」と話してくれました。この言葉を聞いてとても嬉しかったことと、もう少し自分が日本のためにできることをやらなければとも思いました。

その後はシェムリアップを訪れました。そこまでのバスは現地の人たちばかりでほとんど英語が通じなかったのですが、隣の方がおやつを分けてくださったりと、道中にある有名な橋の話をしてくださったりと、カンボジアの方の温かい心に触れることができました。シェムリアップに着くと、アンコール遺跡を観光しました。遺跡のほとんどは千年も昔に作られたとは思えないほど、現地の人々によって丁寧に保存されていました。

カンボジアの人たちは自分た



シェムリアップのアンコール・ワットにて

ちの国の特徴や魅力を知っていて、それをほかの国の人々にもうまく発信しているなと感じた旅でした。では日本のいいところは何だろう、都留のいいところは何だろうなどとも考えるきっかけになりました。そのいいところ、その地にしかないものを多くの人に伝えていけるようにしたいなと思いました。そして、ここには書ききれなかったのですが、私が出会ったカンボジアの方々は、皆つらい過去を乗り越え、とても温かくておらかな人たちでした。コミュニケーションをとることのおもしろさをより一層感じ、もっと英語の勉強あるいは他国の歴史等を学び、刺激を受けるコミュニケーションの機会が多く持てるように努力しようと思いました。今回初めてのアジア一人旅でとても不安でしたが、周到的な準備をして出発したこともあり、現地の人や同じように旅をしている人など、素晴らしい方々と出会うことができた素敵な旅となりました。



伝統舞踊アプサラダンスを見て

学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

「福祉国家」

デンマークの調査



社会学科教授
進藤 兵

今年のフィールドワークⅢでは、デンマークを6泊8日で訪れた。デンマークはOECD調査(2011年)で貧困率が最も少ないとされる先進的な福祉国家のひとつである。今回のフィールドワークでは、現地での視察・聞き取り調査をとおり、「福祉国家というもの」の理念と実態、それを可能にした歴史的・社会的諸要因を学び、これを日本社会の現実と比較することを目的とした。



「福祉国家への旅」を 終えて

社会学科現代社会専攻
3年 佐藤理恵

私は今年、「フィールドワーク(FW)Ⅲ『福祉国家への旅』」という科目を履修し、9月18日～25日までデンマークに行ってきました。ちょうど私が所属しているゼミでの演習テーマも「デンマークと福祉国家の研究」であったことから、実際に現地を訪れて実地調査ができる絶好の機会だと思い参加を決めました。ゼミやFWⅢ履修生との勉強会を通して事前学習を行い、デンマークの歴史や地理、雇用、医療、福祉政策、教育、政治などについての知識を深めてから現地へ臨みました。

FWでは5団体(政府・労働市場庁、経営者団体、労働組合、与党青年部、生産学校)への聞き取り調査、労働博物館・レジスタンス博物館の見学、2軒の家庭訪問を行いました。

デンマークに到着し、コペンハーゲンのまちを歩いてみる

と、頻繁に目に飛び込んでくる光景は、男性が1人でベビーカーを押している姿でした。男性の育児参加については、家庭訪問をした際にも実感しました。2軒の家庭とも男性が育児休暇を取得しており、育児に対して積極的というより、むしろ男性も育児をすることが当たり前、という雰囲気が社会全体でつくられているようにさえ感じられました。

生産学校は義務教育修了後において、無業・失業中であつたり高校を中退したりした若者を対象として「ものづくり」にとりくんでいる、新しいタイプの学校でした。訪問した際に素晴らしいと感じたことは、この生産学校では単に学びや技術を身に付けるだけではなく、様々な活動を通じて何かを成し遂げたという経験を基に、自分自身に自信を与える場としての役割も果たしているということです。自



コペンハーゲン大学にて

分に対してポジティブな感情を持てるようにすることを、第一に考えている点に感動しました。

子育てがしやすい環境や学校の役割から見てきたことは、デンマークが人を育てることをとても大切にしているということです。「世界幸福度ランキング1位の国」たる所以の一端が分かったような気がしました。

FW中は、常に日本との違いを実感していました。デンマークの制度にも負の面が存在することも確かです。しかし、日本でも若者を支援する体制がもっと整備されたり、男性が育児に参加しやすい環境が醸成されたなら、これからの生活が今よりもずっとポジティブなものになると思います。

FWでの経験を今後の学習につなげ、考察をより一層深めていきたいと思っています。

学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

石垣島での
フィールドワーク比較文化学科准教授
山本芳美

比較文化学科では、学外授業として毎年沖縄でのフィールドワークを実施している。石垣島の明石集落の「エイサー祭り」の前後に一週間程度滞在し、フィールド調査の前提となる集落の立地把握にはじまり、開拓に従事したお年寄りの聞き書きのほか、農業体験、祭りのお手伝いをおこなっている。当初は互いに不慣れでぎくしゃくした面もあったが、次第に人々に温かく迎えられようになった。今年は9年目を迎え、一際感慨深い。

沖縄・石垣島の
フィールドワークに参加して

比較文化学科1年 佐々木郁音



エイサーの練習風景

今年の8月、私達はフィールドワークで沖縄・石垣島の明石集落を訪ねた。明石は石垣島の北端にある小さな集落であり、毎年旧盆には「明石エイサー祭」が開催される。比較文化学科では、山本芳美先生の引率のもと毎年参加しており、今回参加したのは1年生3人、3年生4人の計8人であった。28日に石垣島に赴いたのだが、島上空に台風が停滞したために那覇で一泊することになった。29日から明石に入り、祭の翌日の9月1日まで滞在した。

明石での滞在中は、先生から様々な話を伺いながら集落の中や浜辺を散策したり、小学校にて創作エイサーを見学したりで、4日間はあっという間に過ぎてしまった。夜には、地元の方々に交じって伝統的なエイサーの練習にも参加した。特に30日と祭り当日の31日には、会場の設営や食事の準備も手伝わせていただき、その中で地元の方々と交流する機会を持つことができた。

中でも一番記憶に残ったのは「道ジュネー」というものだった。

道ジュネー（道巡礼）とは、青年がエイサーを踊りながら通りを練り歩くもので、明石では1997年頃から途絶えていたところ、今回晴れて復活に至ったと

のことである。その数少ない女性の踊り手の中に、私も含めた文大生4名も加えていただいた。祭りの当日は道の両側に見物客が並ぶ中、200mくらいの道のりを踊りながら歩いた。練習不足だったこともあり、緊張や不安もたくさんあったが、それでも終わる頃には気持ちが晴れ、無性に楽しくなった。明石集落の皆さんに、このような貴重な機会をいただいたことを本当に感謝したい。

祭りでは会場である広場に多くの人が集まり、子供エイサーや大人エイサー、地元出身アーティストの演奏などが行われ、最後には一般の方も交じって会場全体でエイサーを踊った。大盛況だった。

今回の滞在をとおして、明石の魅力は人々にあること、そして人の和の大切さ、温かさというものを私は実感した。また行きたいと思う。明石はそんな素敵なおところだった。



エイサーの衣装で記念撮影

教育実習報告



教育実習を終えて

初等教育学科 3 年 比嘉光代

私は 9 月 3 日から母校である沖縄県の名護市立大宮小学校で約 1 ヶ月間の実習を行わせていただきました。実習前は、正直言ってすべてが不安で仕方ありませんでした。しかし、熱心に指導を行ってくださった先生方や、子どもたちの笑顔に支えられて、学びのあるとても充実した実習期間を過ごすことができました。

学びの 1 つめとしては、授業づくりを通じて得たものが挙げられます。初めは緊張していることを隠すので精いっぱいなだけだった授業も、何度か繰り返していくうちに少しずつ慣れていきました。しかし、実習授業の集大成として行った研究授業（道徳）を含め、授業づくりに対しては多くの課題が残りました。発問・指示、時間配分、板書方法といった点もそうですが、子ども一人ひとりが葛藤して自分の答えを見つけ出すことができるような授業をするためには、授業者が教材についての考えを深め、子どもの実態を把握しておくことが大切だと痛感しまし

た。これは大学でも学んでいましたが、実習で再確認することができました。

学びの 2 つめとして、生徒指導に関して、子ども理解に繋がる部分を学びました。友達と仲良く遊んだり、喧嘩をしたり、悪さをしたり、叱られたりと、登校する時から下校する時まで、多くの喜怒哀楽を見せる子どもたちを目にしました。平穏とは言えない、目まぐるしい毎日の生活の中で、人との関わり方や、自分自身のアイデンティティーを見つけていくのが「学校」という場所なのだろうと感じました。実習期間中は運動会の時期とも重なっていたので、練習・準備から当日までを通

して、子どもの成長と教師の関わりを見ることもできました。

そして最後に、特に感じたことは現場の先生方の凄さです。徹底した教材研究や子どもの反応予想、臨機応変な対応、家庭環境も育ち方も性格も十人十色の子どもたち一人ひとりに目を向けて接している姿を見て、自分に足りない力に気づき感化されました。私は初めて教師の立場に立ち、子ども全員の眼差しが向けられることの責任の大きさを感じ、たくさんの難しさや大変さ、多忙な学校現場の現実を知りました。しかし教師はその分、やりがいのある職業だとも実感しました。私にとって教育実習は悩んだことも失敗したこともすべて含めて学びに繋がるものでした。この実習で感じたことや学んだことをこれからの大学生活や夢の実現に繋げていきたいと思います。



運動会の様子（5年生ソーラン節）

教育実習報告



教育実習反省

国文学科3年 加藤郁美

4週間の中学校での教育実習期間は振り返ってみるとあっという間だったが、内容の濃い充実した時間を過ごせたと感じる。今までとは違う

言葉である。生徒との関わり方を模索し、教員として見られる立場に慣れようとした前半、授業を行う難しさを知り、課題を発見した中盤、見



実習での授業の様子

教員という立場で学校に行くことは、初めての経験と多くの課題に向き合うということだった。大変なこともあったが、同時にやりがいや楽しさも感じる事ができた。

私が実習に行った期間は体育祭の時期でもあったため、生徒と関わる機会も多かった。「生徒としっかり関係づくりが出来れば、授業で困った時も生徒のほうから授業に積極的になってきてくれる。」これは、最初の頃に教務の先生にいただいたアドバイスの

つけた課題の解決に努め、より多くの生徒と関わろうと行動した終盤と、実習が進むにつれて考え方や視点が変化してきたのを感じる。

教員は授業の内容を生徒に教えるものだと実習前には考えていたのだが、実習を通して、授業は生徒が進めていくもの

で、教員はその流れをサポートするものなのではないかと感じられるようになった。学校の主役は生徒自身であるということを、今まで頭では理解出来ていても実感してはいなかった、実習を通して学んだことのひとつである。発問の設定の仕方、生徒のコメントに対する受け答え、授業の構成の仕方等、多くの課題が見つかった。実習に行く前には具体的に考えられなかった課題がひとつひとつ鮮明になったのは、生徒の反応や担当していただいた実習校の先生のアドバイスがあったからである。生徒が自ら考えるような授業づくりは本当に難しい。国語という教科に関しても、ただ問題を解くだけでは足りず、自分の勉強不足を痛感した。だが、課題を発見出来たということは、実習を通して多くのことを学べた証拠なのではないかとも感じる。実習で得た経験を活かしてしっかり勉強していきたい。



グループワークでの指導

教育実習報告



教育実習を終えて

英文学科 4 年 八木亜沙美

今年、母校の高校で教育実習を 3 週間させていただきました。実習が始まり最初に感じたことは、教師という職業の大変さでした。実習に来て初めて「教わる」側ではなく「教える」側の立場となり、先生方の授業を見学させていただきました。当たり前のように受けてきた授業でしたが、教え方一つ、例文一つ、板書一つまで計画が立てられており、教材研究が非常に大切になることを感じました。教科書やワークブックの中で、ここでは何を教えるようとしているのか、どの能力が身に付けばいいのか、逆に、ここではこの能力を求めているわけではない、ということをしつかりと見極めなければならないということが分かりました。授業だけでなく、朝の SHR や日常の生徒指導など何気なくやっているように見える先生方の行動でも、いざ自分がやるとなるとそれすらも上手にできず、先生方の対応の仕方や叱り方なども学びたいと思いました。

様々な教科・先生の授業を見学する中で共通して思ったことは、知識量を増やす必要があるということです。どの先生も豆知識や + α の情報、話を次々と膨らませていく知識があり、聞いていてとても楽しかったです。数学の先生が「教科書に沿って教えていだけなら、自分が

英語を教えることもできる。それができないのは、英語の専門の教員にしか教えられないことがあるからだ。」と仰っていました。英語の教師として私にしか教えられないことを見つけていきたいと思います。

また、「教員が自信を持っていなければ、生徒はついてこない。それは、生徒指導とも繋がってくる。授業力は生徒指導とイコールだ。授業ができない先生の注意を生徒が聞くわけがない」という話をしてくださった先生もありました。この話を聞いたとき、ただ一言「確かにそうだ」と、とても納得しました。自分のことで考えてみると、若い先生や普段適当な先生の言うことは聞き流してしまいがちだったと思います。この先生なら何を言われても怖くない、こんな先生に注意されたくないという思いがあったのは確かです。生徒とうまくコミュニケーションを取ることと馴れ合ってしまうことの境界線は曖昧で難しいと感じました。

今回の実習では、文化祭と体育祭を経験することが出来ました。体育祭では、長縄の練習を通じて、クラスがまとまり対立したりする様子を間近で見て

きました。口を出さず自分達で解決するのを待ち、少しずつ皆が成長していることを実感できました。私が担当させていただいた 1 年 6 組は国際科で 3 年間クラスが変わりません。もっと絆を深めていってほしいと本気で思いました。最初の頃は生徒と話す機会もなく、どうしようかと落ち込んだこともありましたが、しかし、日が経つごとに話し掛けてくれるようになり、クラスの生徒達が「先生、先生」と呼んでくれることをとても嬉しく思い、彼らの言葉は私にもっともっと頑張ろうと思わせてくれました。

私が 3 週間の実習をすばらしいものにできたのは指導担当の先生を始めとする吉原高校の先生方、16HR の生徒を始めとする吉原高校の全生徒、そして 3 週間共に成長し合ってきた実習生の皆さんのおかげです。毎日のように掛けて下さる先生のありがたいお言葉に、時に励まされ時に落ち込み、とても刺激されました。「100% 生徒に合う先生はいない。けど生徒は先生の頑張りをしている。頑張り次第で受け入れてくれる。」まだまだ教師になるには未完成な部分が多いですが、残された学生生活の中で自分を磨いていきたいと思っています。



吉原高校 16HR の体育祭

講演会だより

英文学科・英文学会共催 前期講演会

2012年度英文学科・英文学会共催講演会

ガー・レイノルズ先生

「Simplicity, engagement, and the art of 21st-century presentation」

2012年6月20日(水)、本学2号館にて英文学科・英文学会共催前期講演会が開催されました。講師には、関西外国語大学准教授のGarr Reynolds先生をお招きし、“Simplicity, engagement, and the art of 21st-century presentation”という演題で講演いただきました。



講演会の様子

講演会の冒頭、本学英文学科のHamish Gillies(ヘイミッシュ・ギリズ)先生より「プレゼンテーションのエキスパート」という紹介を受けたReynolds先生の講演は、いかに相手に分かりやすく“伝える”かをテーマに、聴く者を惹きつける斬新なプレゼンテーションによって進められました。突如スクリーンに映し出された「元気ですか?」という大きな文字と問いかけにより、会場の雰囲気を一瞬で和やかにし、まずいくつかの独創的なプレゼンテーションの例を紹介したうえで、話し手と聴き手の両者にとって有意義

なプレゼンテーションを生み出す方法を伝授してくださいました。その内容を簡潔に示すと

- ① Variety (内容の充実)
 - ② Doing (積極的な行動)
 - ③ Get Close (壁を取り除く)
- といったものです。たとえば①では、よいプレゼン資料はシンプルで要点がまとまっており、

ビジュアルを効果的に取り入れる必要があること。

②のDoingとは、話者が魅力的なスピーチをして聴き手に興味を持たせることも重要ですが、聴き手もそこから自分自身で学びを深めなくては意味がないこと。

③に関しては“壁”つまりはメモやパソコン、教卓といったものを話し手は取り除き、聴く側とアイコンタクトをとり、表情もよく観察しながら話を進めるといったことなどです。今回の



アクションも交えながら説明

講演では、より良いプレゼンをするためには何が重要であるのかということを知ることができました。そして何より、そういった内容を先生ご自身が、今回の講演で身をもって示されていたので、聞く側の学生としても、よりイメージを掴みやすかったと思います。その他にもワークショップを取り入れた先生の講演は大変活気のあるものとなり、あっという間に終了時刻を迎えてしまいました。個人的にはまだまだ先生から学びたいことが多くありましたが、伝授いただいたことを実践することが大切なのだと考えます。この先、社会に出てからも大変役に立つお話をしていただいたReynolds先生には、遠方からわざわざ足を運んでくださったことも含めまして大変感謝しております。ありがとうございました。

(英文学科2年 岡田健吾)

講師紹介



Garr Reynolds(ガー・レイノルズ)

国際的ベストセラー『プレゼンテーションZEN』の著者であり、デザイナー、ミュージシャンとしても活躍中。2011年にはSay Mediaの「インターネットで最も影響力のある声100」に選出された。シリコンバレーのアップル社での勤務を経て、現在は関西外国語大学准教授。奈良県郊外で竹林に囲まれ暮らしている。

講演会だより

社会学科講演会

2012 年度社会学科講演会

安田純平先生

「シリアの反政府運動と軍による掃討作戦の実態

ーフリージャーナリスト安田純平氏を講師に迎えてー」

2012 年 10 月 17 日、フリージャーナリストの安田純平さんを本学に迎え「シリアの反政府運動と軍による掃討作戦の実態」という演題で講演会が開催されました。この講演会は、社会学科専門科目「現代世界と平和」のスピノフとして同講義を担当されている佐伯奈津子先生（本学兼任講師）のご協力のもと開催された特別講演会です。

安田さんが本学で講師を担当されるのは 2 回目で、前回はイラクの戦争民営化と出稼ぎ労働についてお話いただきました（2009 年度、地域交流センター「暮らしと仕事」部門）。今回は 2012 年 6 月から 8 月にかけて敢行したシリア取材について話をいただきました。

安田さんはまず、反政府勢力の視点から取材を行ったこととお話されました。政府側の作戦はインフラを壊し住民を追い出すものであること、反政府側により住民自治が行われていること、反政府勢力への支援が取り沙汰されているが、事実無根の話であることなどを述べられました。次に 2012 年 8 月に本学卒業生の山本美香さんがシリア取材

中に銃撃を受け亡くなった事件についてお話されました。

自らがイラクで拘束された経験と照らし合わせ、事件後に日本国内で報じられた「反政府勢力による陰謀」説には無理があるとの見解を述べられました。さらにシリア情勢が日本と無関係ではないこととお話されました。シリアの情勢については、山本さんの事件以後忘れられつつあるが、シリアは日本の石油の輸入先であるアラブ諸国と近いことから、決して無関係ではないこと、国際社会において日本ができることをしていないことを述べられました。そして講演会の終わりには、参加者へ向けて「外に目を向け

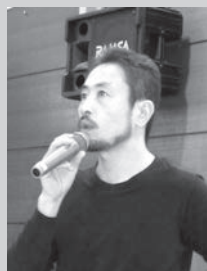
活躍することを目指してほしい。ネットで情報が手に入る昨今だからこそ、自ら現場に足を運び肌感覚で感じて考えてほしい」とのメッセージを送りました。

今回の講演会では、安田さんがまさに足で稼いだ貴重なお話を聴くことができました。約 2 時間の講演を通じて、シリアの騒乱で今も多くの人々が亡くなっていること、シリア情勢と日本は決して無関係ではないことを知り、各々の日常にシリアを意識するきっかけになったと思います。

最後になりますが、今回都留へお越しくくださった安田純平さん、並びに講演会へのご協力をいただいた佐伯奈津子先生をはじめとして、講演会に関わる全ての皆様に感謝いたします。

（社会学科卒業生 松野紀紀）

講師紹介



安田純平(やすだ じゅんぺい)

1974 年生。1997 年に信濃毎日新聞へ入社し、山小屋し尿処理問題や脳死肝移植問題などを担当。2002 年に休暇を使ってアフガニスタン、イラクを取材。2003 年に退社、フリージャーナリストとなりイラクでの戦地取材開始。2004 年、米軍爆撃のあったファルージャ周辺を取材中に武装勢力によって拘束される。2007 年から 2008 年には料理人としてイラク・バグダッドの民間軍事会社に潜入、「戦争の民営化」で世界中から貧しい人びとが集められ、出稼ぎ労働者として働いている実態を明らかにした。著書に『ルポ戦場出稼ぎ労働者』（集英社新書、2010 年）など。

文大だより

夏季オープンキャンパス報告

今年の夏季オープンキャンパスは、7月21日（土）に開催いたしました。主要なイベントとしては、例年どおり学科別説明会、大学概要説明会（1・2年生向け）、学科別特別講義、学生ガイドによるキャンパスツアー、個別相談会（大学周辺・下宿情報含む）、学食体験などを実施。また、各部・サークル活動の紹介、ミニコンサートなどでは学生にも協力いただき、日頃の練習の成果を披露し、参加した高校生や保護者を楽し

ませてくれました。

参加者は年々増加しており、今年は高校生等が1,064名、保護者等を含めると約1,850名の方に来校いただき過去最高を記録しました。県外からの参加者の方が多いのですが、年々、県内からの参加者が増加する傾向にあるようです。



説明会の様子



様々な資料も配布しました

今年は外部からお弁当・都留市のお土産品を手配（都留市ミニ物産展）し、都留市全体でのおもてなし感を演出しま

した。改善すべき点もありますが、参加された方からは「大学の特色や進路、学ぶことなどがわかった」、「先生と生徒の距離が近いところに魅力を感じた」、「個別相談で疑問点が解消され、受験に向け勇気づけられた」、「実際に訪れて話を聞いたことで、大学や学生の雰囲気が分かった」、「合格してこの大学で学びたい」などの感想が寄せられ好評のうちに終了しました。

学内で防災訓練を実施

昨年度は防災委員会を設置し、学内の防災体制の整備を図りましたが、今年は7月4日（水）に全学的な防災訓練（避難訓練）を実施いたしました。訓練の内容としては、講義中に県内を震源地とするマグニチュード7級の地震が発生したことを想定し、各教室から授業担当教員の指示のも

と、学生を避難場所であるグラウンドへ安全かつ迅速に避難させるというものです。

当日の訓練では本部棟2階に対策本部を設置し、30講義中の1,500名以上の学生に対して、緊急放送や建物からの避難指示などを行いました。20分ほどで全ての学生を安全にグラウンドに避難さ



災害対策本部

せることができましたが、実施後のアンケートでは、「一部の建物では放送が聞こえなかった」、「非常階段などが狭い」など改善すべき点も判明しました。

文大だより

第 39 回 鶴鷹祭開催

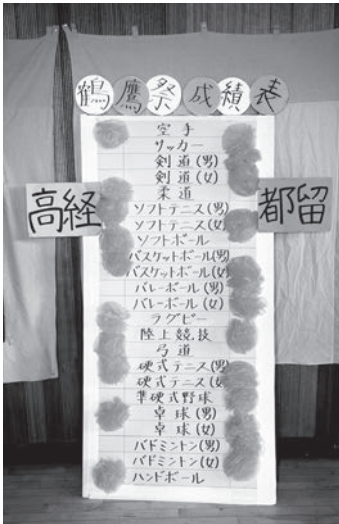
6 月 23 日(土)と 24 日(日)の 2 日間、都留文科大学「鶴」と高崎経済大学「鷹」において、伝統の鶴鷹祭(総合体育対抗戦)が開催されました。会場は都留市と高崎市での隔年開催としていますが、今年は高崎市での決戦となるため、本学からはバス 7 台、総勢 300 名を超える学生(9 名の教職員を含む)にて、昨年の悔しさを晴らすべく『攻～勝利への執念～』をスローガンに掲げ、高崎経済大学へ乗り込みました。一方の「鷹」

側も連覇を狙い、『覇～完全なる勝利を～』のスローガンのもと、16 種目(男女別の種目もあり、実質 23 競技種目)の対抗戦を行いました。

開会式では伝統となっている両校の応援団によるエール交換とともに、本学のモダンダンスサークルによるチアリーディングが披露され、大会に華を添えました。

1 日目はバスケットボール、陸上競技、サッカーなど 14 競技が行なわれ、6 対 8 と本学のリードで折り返しま

した。2 日目にはバドミントン、卓球、準硬式野球などが行なわれましたが、9 競技中で 5 勝を挙げたことにより、2 日間の総合では



種目	高経	都留
サッカー	○	×
剣道(男)	○	×
剣道(女)	○	×
柔道	○	×
ソフトテニス(男)	○	×
ソフトテニス(女)	○	×
ソフトボール	○	×
バスケットボール(男)	○	×
バスケットボール(女)	○	×
バレーボール(男)	○	×
バレーボール(女)	○	×
ラグビー	○	×
陸上競技	○	×
弓道	○	×
硬式テニス(男)	○	×
硬式テニス(女)	○	×
準硬式野球	○	×
卓球(男)	○	×
卓球(女)	○	×
バドミントン(男)	○	×
バドミントン(女)	○	×
ハンドボール	○	×

第 39 回 成績表

本学の 13 勝 10 敗となり、接戦の末に見事勝利しました。(これで通算戦績は、本学「鶴」の 21 勝、高崎経済大学「鷹」の 16 勝、2 分け)

両大学の名誉と威信をかけて行なわれた「鶴鷹祭」、スポーツを通じての交流の中にも様々な感動的なドラマがありました。そして、今回の勝利により、本学の新たなる連覇の幕が開けられました。



表彰式

都留市防災講演会

10 月 31 日(木)に都の杜「うぐいすホール(大ホール)」において、本学初等教育学科中井均教授が講師となり、都留市消防職員・消防団・一般市民を対象とした防災講演会が開催されました。

当日は「自然災害から身を守るために一都留の自然災害危険度一」と題し、各種の自然災害の種類やその原因、また、都留市で起こりうる自然災害などについて、丁寧かつ詳しい説明がされました。400 名近くの方が参加されましたが、「都留市で最も注意すべきは火山灰」という説明や、市内の避難場所の紹介などもあり、非常に役立つ講演会となりました。



講演の様子

文大だより

都留文科大学合唱団 5年連続で全国大会出場

本学の合唱団は、10月に山梨県甲府市のコラニー文化ホールで行なわれた「第67回 関東合唱コンクール大学部門」において、金賞を受賞（優勝）しました。その結果11月24日（土）に富山県で開催された「第65回 全日本合唱コンクール全国大会」への出場が決定し、「全国大会で5年連続の演奏」という機会を得ることができました。来年からカテゴリー変更があり、今回が大学部門としての最後の年となるため、顧問の清水雅彦教授をはじめ部員の皆さんの大会にかける想いは熱く、これまで以上にひたむきな練習を重ねてきました。

日々の真摯な態度、気持ちが1つとなった素晴らしいハーモニー。今回の全国大会においても、みごと金賞を受賞いたしました。この受賞により全国大会でも4年連続の金賞となり、今年度卒業する部員にとっても有終の美を飾ることができました。

文大合唱団は、これからも深い祈りと想いを込めて歌い続けます。



合唱団のメンバー



応援懸垂幕

とびだせ美術館！ 「アート巣箱をつくろう」の実施

山梨県立美術館が主宰する従来のワークショップ「新みなび」が、今年度より『とびだせ美術館！』にパワーアップし、6月～8月の期間に全7会場・10回の各種企画が開催されました。その企画の1つとして、本学美術研究棟を会場に、7月15日（日）の午後1時30分～午後3時30

分に『とびだせ美術館！「アート巣箱をつくろう」』を実施いたしました。本学の鳥原正敏教授、北垣憲仁特任准教授、舘山拓人特任准教授、及び中村伸也笛吹市立春日居小学校教諭が講師となり、参加した親子が巣箱に絵の具を使って、自由に絵や模様を描きました。定員は100名の予定で

したが、当日はそれを大きく上回る方にご参加いただき、楽しそうに作品をつくりました。なお、後日、それらの作品は山梨県立美術館に展示され、多くの皆さんに見ていただきました。



当日の様子

文大だより

第 57 回桂川祭開催

11月1日(木)から3日(土)までの3日間にわたり、第57回桂川祭が多くの市民も参加するなか盛大に開催されました。



開会式でのバルーンリリース

今年のメインテーマは『一祭合祭(いっさいがっさい)』。このテーマには、「人と人が力を合わせることで無限大の可能性が広がる。一人ひとりが持ち前の力を発揮して輝ける学園祭にしよう!」という意味が込められています。開会式でのバルーンリリースから始まり、学内の各団体による模擬店や文化展、大道芸人によるパフォーマンスやお笑い芸人「サンドウィッチマ

ン」などによるライブが行なわれ会場は大いに盛り上がりしました。恒例の「学長と鍋ろう」では、学生の手作ってくれた美味しい鍋を食べながら、加藤祐三学長並びに高田副学長と多くの学生が1時間ほど話し合いを行い、交流を楽しみました。特に学長は、美味しいので作り方を教わりたいと話していました。学生にとっては、なかなか交流する機会の少ない学長を身近に感じるとともに、今後の人生において



看板 boy& 看板 girl de show!



ステージや学生による模擬店で盛り上り

役立つ話を聞くことができたのではないのでしょうか。

最終日の閉会式では、夜空に華やかな花火が打ち上げられ、多くの来場者の見守るなか3日間の幕を閉じました。発表する催し物の練習や、各種準備のため、多くの学生が連日遅くまで一生懸命作業をしていました。また、実行委員会のみなさんが「ごみ減量計画」、「酒類監督者である赤鉢巻部隊による見廻り」など、様々な取り組み・工夫をされたことで、ルールが守られた楽しい時間を過ごすことができました。来場いただいた方を含め、全ての参加者の力を合わせたことにより、今回の桂川祭が輝ける楽しい学園祭となりました。まさに「一祭合祭」。

《桂川祭を振り返って》

本年度の第57回桂川祭は、11月1日(木)から11月3日(土)の3日間で行われました。「一祭合祭(いっさいがっさい)」をテーマに掲げ、当日は様々な企画を行い来場者の方々に楽しんで頂けたと思います。実行委員のみならず大学関係者の皆様、地域の皆様、学生の皆様のご協力もありまして、無事に終了することができました。この場をお借りしまして、厚くお礼を申し上げます。

第57回 桂川祭実行委員会 委員長 深澤 望

都留文科大学準硬式野球部
清瀬杯に出場

本学の準硬式野球部は、新関東大学準硬式野球連盟1部リーグに所属していますが、その春季リーグで見事準優勝し、関東地区の代表(4校)として、清瀬杯第44回全日

本大学選抜準硬式野球大会へ出場しました。全国大会は石川県において8月18日～22日の日程により、各地区から勝ち残った16校で熱戦が繰り広げられました。1回

戦では九州地区代表の長崎大学を破り、2回戦へと駒を進めました。愛知教育大学との接戦の末、今回は涙を飲むこととなりました。

文大だより

市民公開講座

今年の市民公開講座は、「都留市子ども教室」（小学校区ごとに放課後や週末の子どものための安全・安心な居場所



清水先生による「音楽を楽しもう！」

でなく、教員が市内のコミュニティセンターへ出向いて実施することもありました。いずれの講座にも多くの子どもが参加し、目をキラキラ輝かせながら楽しんでいました。市との連携による市民公開講座は今回が初めての試みでしたが、参加した子供たちやその保護者並びに市の担当者



吉住先生による「葉脈しおり」

からは大変好評であり、次回以降も続けてほしいとの声が寄せられています。実施した5講座は次のとおりです。

を設け、様々な体験活動を行う市の事業）と連携して、8月から翌年の1月にかけて本学の5名の教員が講師となり全8回の講座を実施しています。講座会場も本学教室だけ

「都留市は自然の博物館」北垣憲仁特任准教授（7月）、「音楽を楽しもう」清水雅彦教授（8月）、「巨大絵本を使った読み聞かせ」日向良和講師（8月～1月の全4回）、「葉脈しおり」吉住典子名誉教授（8月）、「折り紙を使った算数」寺川宏之教授（10月）

平成24年度 県民コミュニティカレッジ講座

平成19年度より山梨県内の大学・短期大学とNPO法人「大学コンソーシアムやまなし」の共催事業として、広く市民の方々に学習機会を提供することを目的として、「県民コミュニティカレッジ講座」を実施しています。今年度は10月と11月において、本学英文学科のハイミッシュ・ギリズ准教授が講師となり、テーマを「イギリスの文化 (British

Culture)」として5回の講座を開催いたしました。今年はロンドンオリンピックでイギリスに注目が集まったこともあり、イギリス文化に興味・関心のある参加者が会場の2号館102教室に集い、ワークショップの形式で講座を楽しみました。

第1回 イギリスの文化入門（10月2日）、第2回 イギリス英語を味わう（10月16日）、第3回 イギリスを食べる（10月30日）、第4回 イギリスのシネマを見る（11月13日）、第5回 イギリスを踊る（11月27日）



講座の様子

文大だより

現職教員教育講座

本学独自の夏季集中講座である「現職教員教育講座」を、山梨県教育センターの教職 10 年研修事業との併設講座として、7 月 26 日（木）と 27 日（金）の 2 日間において開催したところ、多くの小・中学校の先生方が参加されました。

全体の講座テーマを「教師



山崎先生の講義

の子ども理解と学習指導」とし、子どもの思考や感情・感覚に即した学習のあり方を探り、特に授業において子どもを支える学習指導のあり方を深めることを追求した内容となりました。各講師のこれまでの体験談などを交えたケースメソッド、グループ討論に加え、今回は身の回りにある道具を用いて手軽にでき、生徒の興味を引く理科の実験の方法などもご紹介しました。この講座には、近隣都県からも多くの参加者があり、教育を考える場として期待する声も多く寄せられています。

- 26 日：「講座の趣旨について」杉本光司教授、「子ども理解と学習指導」山崎隆夫非常勤講師、「教科に関する研究講座Ⅰー子どもがわかる授業を作る・理科ー」平野耕一准教授



バットを用いた実験（平野准教授）

- 27 日：「学習意欲を引き出す学びづくりー社会科教育を通してー」田所恭介非常勤講師、「英語指導法改善のためのヒント」松土 清特任教授、「教科に関する研究講座Ⅱー子どもがわかる授業を作る・国語ー」鶴田清司教授

教員免許更新講座

7 月 1 日から 29 日までの土曜日又は日曜日（計 6 日間）において、本学で全 11 講習による教員免許状更新講習が開催されました。今回で 4 年目となりますが、実受講者数は 239 名、延べ受講者数では 616 名の方の参加がありました。受講者の中には本学卒業生の方も多くおり、遠くは愛知県から参加され、懐かしの学び舎にて旧友と共に受講されたようです。また、講習内容についても大変好評でした。

- 小学校教諭向け：「数学の基礎としての算数」寺川宏之教授、「国語科を中心とした言語活動の充実～論理的な思考力・表現力の育成のために～」鶴田清司教授、「自然環境と自然災害をどのように教えるか」坂田有紀子教授、「感性を働かせて描いてみよう！動いてみよう」【図工】竹下勝雄教授、鳥原正敏教授、舘山拓人特任准教授【体育】柳 宏教授、「小学校英語授業での楽しいアクティビティー」ヘイミッシュ・ギリズ准教授

- 中・高等学校教諭向け：「現代日本の政治・経済の課題」菊池信輝准教授、村上研一准教授、「デジタル教材の新しい世界と情報モラル教育の指導」杉本光司教授、「国語教材の読みと授業づくり」中村龍一非常勤講師、「子どもたちの心とかわるために」筒井潤子准教授、「Authentic Material と Trivia による英語授業の活性化」松土 清特任教授
- 必須領域：「教育の最新事情」佐藤隆教授、市原学准教授、大島英樹非常勤講師

文大だより

キズナプロジェクトにより バヌアツ、パラオの学生が本学を見学

平成24年10月12日(金)
に、外務省のアジア大洋州地

要説明を行いました。両国と
も英語が公用語となっている



パラオ、バヌアツの学生と本学学生と
森のようちえん参加の園児

域及び北米地域との青少年交流事業（キズナ強化プロジェクト）の一環として、青年海外協力隊（JOCA）のコーディネートにより本学にバヌアツの大学生23名とパラオの高校生23名の計46名が見学に訪れました。一行が本学学食を利用して昼食をとった後、大会議室にて本学の概

要説明を行いました。両国とも英語が公用語となっているため、JOCAのコーディネーターによる通訳での説明となりました。次に、社会学科高田研教授の授業である「森のようちえん」に体験参加し、本学学生によるサポ

ートのなか、園児による「能」を見学したり、バヌアツ・パ



パラオの踊りを伝授



本学の概要を説明

ラオの踊りや遊びなどを教えたり交流を図りました。園児が日本の伝統芸能である「能」を演じたことには、とても驚いていました。その後は学生にできる「防災対策・災害支援への取り組み」について、本学学生による取り組みの発表を含め、各国における活動や支援体制などの報告を行うことで、さらに情報交換及び交流を深めました。

なお、一行が無事に帰国した後に、JOCAのコーディネーターからは見学のお礼とともにパラオ、バヌアツの両学生が「本学での交流体験がとても楽しく印象に残り、本学に留学してみたい」と話していたとのうれしい報告を受けました。

都留市「ふるさと時代祭り」への参加

都留市では毎年9月1日に、城下町の秋を彩る「ふるさと時代祭り」を開催しています。主な催し物は、地元の生出（おいで）神社で行われてきた「八朔祭」であり、その付祭としての大名行列や屋台巡行などがあげられます。大名行列には市内の小・中学生や多くの市民とともに、本学学生も参加し、奴（やっこ）姿の赤熊（しゃぐま）、姫様、腰元、馬に乗った殿様、侍などに扮して、壮大な時代絵巻を繰り広げます。今年は、本学の学生は腰元、鷹匠、侍、奴として参加しました。特に留学生にとっては、貴重な体験となったのではないのでしょうか。



留学生も参加

文大だより

ドイツの若者と交流して

私たちは9月11日から25日にかけて「日独学生青年リーダー交流事業」に参加してきました。この事業は独立行政法人国立青少年教育振興機構とドイツの「日独ベルリンセンター」が共同で企画、実施しているものです。次世代の社会を担う若者のリーダーの素質を高め、社会参画する人を育てることを目的としています。



交流パーティーの様子

私たちはドイツの旧東ドイツ地域であるベルリンと、ドレスデンに1週間ずつ滞在し、計2週間ドイツでの研修旅行を過ごしました。ドイツで訪問したボランティア団体は、ラーベンスブリュック

強制収容所、児童連合（若者が企画・運営するボランティア団体）、マライケ（低所得者が多く暮らす地域での学童保育）、また、トルコ系移民が多く通う小学校など様々な団体の方にお話を聞きました。

特に印象深かったのは、ドイツの若者とのディスカッションです。ドイツの学校教育は自分の意見を伝えること、批判的意識を持つことを大切にしています。そのことが、発言の意欲にも、社会参画への行動力にもつながっていると感じました。

最後に、教員志望の人が多い本学の皆さんに伝えたいことがあります。それは、「ドイツでの教育は多様である」ということです。教育を担っているのは学校だけではなく、ボランティアが子どもの豊かな視野、経験に貢献しています。学校側が、ボランティア団体へ教育の参加を促し、現在の社会を疑問視できる多様な知識をワークショップ形式で楽しく行ってい

ました。また、ドイツの若者とのディスカッションで感じたのは、歴史教育における「加害者」意識の高さです。「加害者」である認識が高いことが、EUにあらわれるように過去に被害を受けた国との友好につながっていると思います。ドイツの周辺諸国との関係の築き方から、今日の日本が学ぶべきことが多くあると感じました。

ドイツの若者とのディスカッションや、様々なボランティア団体の話を伺う機会はとても貴重なものでした。来年もあるので、是非みなさんも参加してみてください！

社会学科

環境コミュニティ創造専攻

4年 佐藤 結生

比較文化学科

3年 茂木理穂子



茂木理穂子さん(左)と佐藤結生さん(右)

韓国外国語大学校との
交換留学プログラムを新たに開始！

平成25年度から既存の交換留学制度に加え、新たに韓国外国語大学校と交換留学プログラムをスタートさせます。この交換留学を通して生きた韓国語を学び、韓国の文化と歴史への理解を深め、豊かな国際感覚を身につけましょう。

交換留学プログラム

「交換留学プログラム」とは、1年間本学から交換留学生として、派遣先大学（海外の大学）へ

派遣するプログラムであり、学費を本学に通常とおり納めることにより、派遣先大学に支払う必要はありません。また、留学している1年間において派遣先大学で取得した単位も、本学の卒業単位として認定されますので、留学により学年が遅れることもありません（但し、派遣時の学年、派遣時における単位取得状況、学科によっては4年間で卒業できない場合があります）。年間に派遣する人数は2名程度で、第1回目の派遣は

平成25年度から予定しています（本学学生で韓国語学習歴が1年以上であることが条件）。

韓国外国語大学校について

1954年にソウル特別市東大門区に創立した外国語大学で、45の言語について外国語学科が設置されており、韓国でもっとも多様な言語を教育・研究する機関の1つです。韓国内の人文系の大学としてはトップ5に入る有名私立大学であり、近代的な設備が整ったソウル市内のキャンパスには、世界各国から多くの留学生が集います。

詳しくは国際交流室にお問い合わせください。

文大だより

キャリア支援センターが
リニューアルオープン

就職委員会委員長 寺川宏之

平成16～22年度の就職状況データから、平成20年(2008年)のリーマン・ショック以降の2年間で、本学の就職状況が著しく悪化していることがわかりました。特に企業志望者の就職決定率(対卒業生数比)の落ち込みは、その時点での過去7年間で最大となっていました。このような状況を受け、平成23年5月25日、キャリアセンター改組委員会(プロジェクトD)が開設され、様々な角度から状況改善に向けた検討が開始されました。

学生の就職活動をさらに支援するため、キャリア・サポート室の内容的充実とともに、学生のニーズに応えられるような、より活用しやすい体制の整備・サービスの向上を行う必要がありました。そして、アドバイザー等の人事配置(増員)からはじまり、セミナーや講座などの内容・形態とその提供方法、施設の整備・充実、そしてそれらを実現するために必要な予算などについて検討を重ねた結果、キャリアサポート室をキャリア支援センターとしてリニューアルすることになりました。

今回のリニューアルにおいて、基本となるコンセプトは、まずは「入ってみようかな?」という気になる空間づくりでした。そこに入ると、明るいゆったりとした雰囲気空間が広がり、自分の疑問や不安について相談できる人がいて、そこを出るときには「また来たい!」という気になる、そのような空間を学生に提供することが最も意識した点でした。

平成24年4月1日、正式に「キャリア支援センター」として

発足し、企業担当アドバイザーの採用をはじめ、いくつかの新規事業に着手しています。そして、本年8月14日に着工し、9月31日に無事に工事が完了し、10月1日から稼働を開始しました。10月22日には、西室陽一理事長、加藤祐三学長、高田理孝副学長兼キャリア支援センター長をお迎えし、キャリア支援センター・リニューアルオープン記念式典を開催しました。さらに、10月26日には本学国文学科卒業生である関西テレビ常務取締役の宮前周司氏を講師としてお迎えし、リニューアル記念講演も行いました。

今回の改修により、既存の壁を取り除いてワンフロアとし、窓も透明なガラスに取り替え、明るい雰囲気空間になりました。その中にはフリースペースがあり、大型モニターを用いて過去のセミナー・講座の様子やこれからの事業の情報を見ることができ、加えて無料給茶機も設置したことから、学生の皆さんが集まり情報交換

の場にもなるのではないかと期待をしています。(お茶を飲みながら新しい情報をチェックしたり、友だちとおしゃべりを楽しんだり、カフェのように利用することもできます。)

今回のリニューアルオープンを迎えるため、多くの方々にご協力を頂きました。スタッフ一同、改めてお礼を申し上げます。キャリア支援センターは新しく生まれ変わりましたが、多くの検討課題が残されており、現在もそれらに取り組んでいます。学生の皆さんには「都留文科大学の学生でよかった」と思ってもらえるように、これからも皆さんのキャリア形成を応援していきます。



リニューアル後のセンター内

前回の学報第119号のP15ページに掲載した就職関係データについて、「調査中」であった数値やその後に変動した数値が確定しましたので、改めて紹介いたします。

平成17～23年度における就職関係データ

	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度
卒業者数 A	629	675	642	683	667	717	761
就職希望者数 B	520	516	490	521	511	530	593
就職決定者数 C	430	488	467	492	459	437	544
大学院等進学者数 D	35	44	47	53	53	51	57
就職率 C/B × 100	82.69	94.57	95.31	94.43	89.82	82.45	91.74
進路決定率 (C+D)/A × 100	73.93	78.81	80.06	79.80	76.76	68.06	78.98
内 訳							
企業	260	315	309	315	252	217	297
教員	135	136	138	153	169	176	193
公務員	29	37	20	24	38	44	54

文大だより

サクライザーが来校 M.D.C. を救う！

山梨県のご当地ヒーローである「甲州戦記サクライザー」が、平成 24 年 6 月 2 日（土）に本校を訪れ、悪の組織から学生を救ってくれました。

サクライザーとは山梨県花の「富士桜」をイメージして作られ、県内を舞台に活躍する特撮ヒーローです。県内の全 27 市区町村を巡りながら、地元の名所や美しい自然並び



ご当地ヒーロー「サクライザー」

に地元の人がヒロイン役として登場する工夫などから、既に第 3 シリーズの放送を終え、第 4 シリーズの放送も決定しているほど人気があります。

都留市での撮影は、前回のリニア見学センターに続き、2 回目となりますが、今回は第 3 シリーズの第 11 話として、本校を舞台に撮影されました。タイト

ルはずばり本学学訓の「菁莪育才」。教員養成系の大学として名高い「本学の学生が、悪の一味の教育係として連れ去られそうになるところを助けられる」という内容でした。ヒロイン役としてモダンダンスサークル（M.D.C.）の皆さんに協力いただき、その熱演により作品に華を添えていただきました。

なお、この模様は YBS にて 9 月 16 日（日）に放送されました。



M.D.C. とサクライザー

宝小学校 6 年生による本学見学

平成 24 年 11 月 7 日（木）に都留市内にある宝小学校の 6 年生 18 名が、小学校の「総合的な学習の時間」を利用して本学を訪れ、留学生との交流や特別講義などを受けました。



留学生のお姉さん、お兄さんと勉強しました

当日は、11 時 30 分頃に到着し、本学の学食を利用して少し早めの昼食をとりました。学食利用は初めての体験だと思いますが、皆さん美味しそうに食べていました。午後は 3 号館の多目的ホールにおいて、6 名の留学生との交流を楽しみました。6 年生は 4 つの班に分かれ、各班の担当となった留学生に対し「好きな日本の食べ物は何か？」など、事前に考えてきた質問をゆっくりとした日本語で尋ねていました。初めのうちは緊張しているようでし



特別講師の佐野先生との記念写真

たが、留学生が丁寧に応えてくれたので、時間が経つとともに打ち解け楽しそうにコミュニケーションをとれる様になりました。その後は、本学職員でありオリンピック選手の佐野夢加さんを講師として、「夢・希望・勇気～ロンドン五輪を目指して～」という特別講義を受け、夢を持つことの大切さなどについて学びました。

文大だより

秋季オープンキャンパス

10月15日(月)から26日(金)まで【水曜日、土曜日、日曜日を除く】の8日間にわたり、秋季オープンキャンパスを開催しました。主な内容として、例年どおり公開授業(90分)への参加、個別相談会、キャンパスツアー、学食体験などを実施。キャンパスツアーへ参加した高校生等が延べ139名、公開授業への参加者が延べ411名と昨年の約1.5倍に増加しま

した。県内からの参加者は74名と増加しておりますが、秋季オープンキャンパスでも県外からの参加者の方が多くなっています。

今年のキャンパスツアー

でも本学学生がガイド役となり、保護者も含む参加者に対しキャンパス及び施設などを約50分かけて丁寧に説明しました。



キャンパスツアーで施設見学



附属図書館も見学

かった」、「大学案内に載っていないことも聞いて良かった」、「案内がわかり易く、大学の様子が良くわかった」など大変好評でした。また、公開授業を受講した学生からも、「実際の授業を受講できて、入学意欲が高まった」、「少人数での授業で、意見の交換も多く充実していた」、「大学生の集中力が高く、良い環境で勉強できると思った」などの感想が寄せられました。

ツアー参加者からは、「先輩に直に質問できたので良

前期修了者卒業式

9月26日(水)本部棟3階大会議室において、平成24年度前期修了卒業証書の授与式が執り行われました。今年は8名の学部卒業者のうち、5名が出席しました。

当日は、担当教員を含め多くの教職員の暖かい眼差しに見守られるなか、加藤祐三学長より1人ひとりに卒業証書が授与されました。卒業証書の授与後には、学長から本学の学章が表す意味や激励・お祝いの言葉が送られました。



学長からの激励

文大だより

山本美香さんを偲んで

平成 24 年 8 月 20 日(月)、本学英文学科の卒業生でジャーナリストの山本美香さんが、シリアのアレッポでの取材中に亡くなられたとの突然の悲報を受けました。長年、世界の紛争地から女性や子供など立場の弱い人々の目線から、自分の目で確かめ、耳で聞き、触ってみたことの証言者となり、世界中に伝えるジャーナリストとして、「平和の尊さ」を発信し続けてきました。

本学においても教養科目の

「キャリア形成論」に過去 2 回ほどゲスト講師として、世界中の紛争地帯を取材した経験をもとに、世界平和と相互理解を願う彼女の熱い想いを学生に伝えていただきました。また、本学の大学案内(2005 年・2006 年版)では、活躍する卒業生としてもご協力いただきました。

山本さんは都留市出身ということもあり、都留市長が実行委員会の会長となり 10 月 4 日(木)に「美香さんのメッセージを未来へ ～故 山本美

香さんを偲ぶ会～」がうぐいすホールで開催されました。市からも、これまでの功績・様々な分野での貢献を称え、第 1 号の市民栄誉賞が贈られました。

ご冥福をお祈りするとともに、彼女が残した多大なる功績が、彼女が望んだであろう世界平和の実現のために生かされることを強く願います。



山本美香さんを偲ぶ会

県立桂高等学校跡地の
利活用問題について

市内にある県立谷村高校と県立桂高校について、山梨県は平成 26 年度に両校を統合再編し、現在の谷村高校の敷地へ新たな高校を開校する考えを示しました。それに伴い、都留市では桂高校の跡地について、有識者会議の提言なども受け、「今後も地域に貢献できる看護師養成系高等教育機関(以下「看護系学校」として利活用することに取り組

む」と公表しました。その看護系学校の開設方法案としては、都留市での開設(直営方式、公設民営方式、誘致方式)による設置形態に加え、本学設置団体である公立大学法人都留文科大学(以下「本法人」)による設置(新大学、学部再編など)の可能性の検討要請を受けました。本法人では様々な調査・分析・検討を行ったうえで、平成 24 年 7

月末に都留市に対して「理事長・学長の強いリーダーシップの下で、これからも『教員養成系大学』として魅力あふれる大学づくりに取り組む」との報告を行いました。その後、都留市では各開設方法のメリット・デメリットを含めた様々な条件の比較検討を行った末、「誘致方式」が最適解であるとの最終判断を示し、看護系大学等誘致事業の事業候補者の募集を開始しており、平成 25 年 3 月に決定される予定です。

お詫びと訂正

都留文科大学報第 118 号に掲載した卒業論文一覧・比較文化学科に誤りがございましたので、訂正するとともににお詫び申し上げます。

卒業論文一覧・比較文化学科		正	誤
分田順子ゼミ	34 頁	佐藤央騎 ギャングスタ・ラップは白人のライフスタイルをどう変えたか — 50 CENT の影響を中心に—	佐藤英騎 ギャングスタ・ラップは白人のライフスタイルをどう変えたか — 50 CENT の影響を中心に—

編集後記

ロンドン
オリンピック観戦記

小俣昌寛

英国王室、ビッグベン、テムズ川、大英博物館、ダブルデッカー（2階建てバス）、チューブ（地下鉄）、ロンドンプリッジなど、数多くの有名な施設・観光地を有するイギリスのロンドン。このロンドンにおいて、平成24年7月から8月にかけて世界中が注目するロンドンオリンピック大会が開催されました。そして、このロンドンオリンピックでは、本学の麻場教授がコーチとして率いる日本陸上女子4×100mリレーチームが、厳しい予選を勝ち抜き東京オリンピック以来48年ぶりとなる出場権を勝ち取りました。さらに、本学職員の佐野夢加さんが日本代表選手となり、この夢舞台にアンカーとして出場し、陸上選手としての夢を叶えました。この快挙を応援するため、佐野選手と土井選手（現役高校生で日本代表）の応援団一行はフランクフルトを経由し、約9時間かけてロンドンに乗り込みました。大会期間中はオリンピック一色となり、ロンドンの有名な観光施設には公式キャラクターの「ウェンロック」像が様々な格好で登場し盛上げていました。もともヨーロッパでは陸上競技の人気の高い国に、オリンピックということから、8万人収容できるスタジアムは世界中からの観客で超満員。曇りがちの日が多いといわれるイギリスですが、レース当日は快晴で強い日差しがスタジアム内に射し込み、その熱気が国旗を掲げて自国選手に声援を送る観客達をさらに熱狂させているようでした。そして、今大会注目選手の1人であるジャマイカのウサイン・ボルト選手（短距離走）が、100m、200m、4×100mリレーで金メダルを獲得すると会場のボルテージは最高潮となりました。

イギリスと日本との時差は約9時間あるため、陸上女子4×100mリレーは日本では早朝3時頃のライブ中継となりました。しかし、当日は陸上部をはじめとして約80名の大応援団が、本学3号館ホールに集まりモニター越しに大声援を送りました。残念ながら日本チームは決勝に進むことはできませんでしたが、その健闘に日本中が勇気をもらいました。



August, 2012 London

本 ぶんだい堂



加藤祐三／著
2012年9月
講談社出版 920円＋税

◇かとうゆうぞう 学長

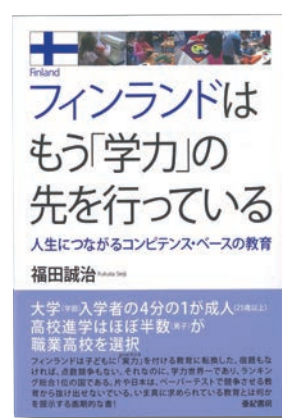
幕末外交と開国



鈴木武晴／著
2012年9月
山梨日日新聞社出版 1,800円＋税

◇すずきたけはる 国文学科教授

甲斐 万葉の歌譜



福田誠治／著
2012年10月
亜紀書房出版 1,600円＋税

◇ふくたせいじ 比較文化学科教授

フィンランドはもう「学力」の先を行っている
人生につながるコンピテンズ・ベースの教育